

霜多正次

# 道の島

第二部

新日本出版社

# 道の島

第二部

霜多正次



しも 霜 多 せい じ 正 次

1913年、沖縄県に生まれる

日本民主主義文学同盟議長

主なる作品 「沖縄島」「守礼の民」「日本兵」

「榕樹」「虜囚の哭」「明けもどろ」

「星晴れ」など

## 道の島 第二部

---

1976年9月25日 初 版

1976年10月5日 第二刷

著 者 霜 多 せい じ 正 次

発行者 松 宮 龍 起

---

郵便番号 112 東京都文京区大塚3の3の1

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (945) 8 5 1 1

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷・製本 古賀製本

---

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

道の島  
第二部



ハツが子どもを産むと、徳平たちの生活はだいふ趣きが  
 変ってきた。

出産までは、ハツが紡績をやめた経済的な打撃もあり、  
 初産の不安もあって、二人ともなんとなく落着かなかつた  
 が、子どもが生れてしまうと、まるで台風のアとの海のよ  
 うに穏やかになった。そして、生活はもっぱら生れた和男  
 を中心に、あらたなサイクルを回転するようになった。

徳平は、ハツが胸をひろげて和男に乳をのませていると  
 きなど、これまでとは別人のように安らかで柔和なその表  
 情に目を見はった。母親になった彼女は、肌も柔かく白く  
 なり、目はいつもまわりのものを包みこむように優しく、  
 すっかり落着いてきた。そんな彼女を見てみると、徳平は  
 自分が子どもっぽく、頼りなく思えてならなかった。

しかし、彼はときどき、これまでのがむしろに生きて

きた過去をふりかえって、あ、とうとうここまでできたか、  
 と感慨にとらわれることがあった。和男が笑うようになってからは、その柔かい頬をつついて笑わせるのがなんとも  
 楽しい日課になったが、そんなときの自分が、かつて奴やつっ  
 子であった自分の姿と重なり合うのだった。

シマを逃げ出してきたときはもちろん、一年後にハツが  
 追っかけてきたときも、彼はこのような生活を想像するこ  
 となどとてもできなかった。先の見えないでこぼこの坂道  
 を、ただ手さぐりであがってきたのだった。

しかしいま、その道はようやく平坦に、明るくなつてき  
 たようである。子どもが生れると計画が大きく狂うのでは  
 ないかと心配したが、それもどうやら案するより産むが易  
 いたとえどおりになったようである。

いま彼の賃金は一元三十銭になっていたから、ハツの内  
 職（彼女は階下のミネといっしょにメリヤス・シャツのボ  
 タンづけをしていた）の収入を合わせると、当初の十年計  
 画をもっと縮めることができそうだった。

そんな平穩のなかで、ハツは自然そのもののように健康  
 で乳の出もよく、和男は勢いよく泣き叫びながら生長し  
 た。彼はよく眠るので、ハツは彼をそばに寝かせておい  
 て、毎日階下のミネの部屋で内職に精をだした。

六畳の部屋いっぱい肌色の新品のシャツをひろげて、ミネとおしゃべりをしながら仕事するのだった。シマの帽子編みとおなじで、ミネもそのほうが能率が上がるからであった。

和男がひとりで坐るようになり、なんでも手あたりしだいに擱んで口へもっていくようになったところのある日、ハツは便所から出てくると、

「あ、よかった」

とミネに大げさに笑いかけた。五ヵ月たってもまだなかった月のものが、やっと下りたからであった。このところ、彼女はそれがただひとつの気がかりだった。もしかしたらまた妊娠したのではないかと心配だったのである。

シマでは、子どもを産みだすと、あとは月経を見ることがなくつぎつぎと年子を産む女が多かった。自分もそんなふうになるのではないかとハツは気が気でなかったのである。

そうなれば、徳平の十年計画も狂ってくるので、彼女は徳平にはそのことを黙っていた。まだはつきりしたわけではなかったからである。

「ほーれ、うちがいうたとおりやないか」

ミネがそういって、鼻をふくらませた。彼女は、紡績に

いた女がそんなにつぎつぎに子を産むはずがない、といい張っていたのである。

「きつと、そうやね」

と、ハツも彼女の主張を支持した。月経があったからといって、来月以降もあるという保証はなにもなかったのが、いまはミネの主張を信じたい気持ちになっていたのである。

だが、それから二、三日たって、そういうのききなことはではない、もっと大きな不幸が、とつぜんハツにやってきた。

いつものように夫たちを工場に送りだして、二人で内職にとりかかったばかりのとき、ハツに電報がきたのだった。

「与那嶺徳平さんに、電報ですよ」と郵便屋さんにいわれて、ハツはさいしょ、なんの心当りもなく首をかしげた。

電報といえば、これまでは山入端先生や、キク姉さんや、健一や、徳平の弟の徳松たちが上阪してきたとき、ムカエタノムという電報をもらった経験しかなかったので、そういう心当りの人はいなかったのである。

もしかしたら徳平の家になにか不幸でも、といっぼうでは胸さわぎをおぼえながら、ハツは電文を開いて見た。

トクヘイシヨウシユウサレタ」五ツキ××ヒカゴ  
シ  
マニユウタイ」イツタンカエレチ

玄関から部屋に歩いてきながら、その片かな文を目で追  
っていたハツは、部屋の入口でふいに立ちどまった。

彼女の顔色がみるみる変り、手にもっていた電報用紙が  
はげしく震えだすのを見て、ミネが「どないしたん！」と  
叫んだ。

ハツはしかしなにも聞こえなかったように、なおぼんや  
り立ちつくしていた。

ミネが立ちあがって、「だれからきたん」とそばに寄っ  
てきた。ハツは黙って電報をミネにわたすと、そのまま敷  
居の上にばたつと坐りこんでしまった。

「アイ、徳平が召集されたんやね。それやたいへんやわ」  
ハツは、そんなことばもほとんど耳に入っていないなかつ  
た。からだがクサヤミヤー（フィラリヤ患者）のように震  
えてるのがわかるだけで、なにも考えられなかった。

「徳平に早よう知らさんば」

ミネにそういわれて、ハツははじめてうつろな目をカッ  
と見ひらいて、立ちあがった。そして部屋の隅に寝かせて  
あった和男を「お願いします」といって、家をとび出し  
た。

工場までは歩いて五分とかからなかった。ハツは走っ  
た。途中で出会った顔見知りのかみさんたちが、挨拶もせ  
ずに走っていくハツを不思議そうに見送っていた。

ハツは工場に飛びこんでも、まわりの工員たちは目に入  
らぬというふうに、まっすぐ徳平のところに走ってといっ  
た。

「たいへんよ」

うわずった声でそういって、電報をつき出した。

汚れた手で電文をひろげていた徳平の顔が、みるみるひ  
きつった。二人のただならぬ様子に、まわりの工員たちが  
「なんや」といって寄ってきた。

徳平が召集されたことがわかると、工員たちがつきつぎ  
に機械をとめて集ってきた。なかに徳松もいた。彼は去年  
徳平が呼びよせて、ここの見習工になって住みこんでいた  
のである。

彼は事態の深刻さがよくのみこめていない様子で、人前  
で肉親に接するときのさりげないふうを装っていた。

しかしほかの工員たちは、徳平に召集がきたのは信じら  
れぬというふうに、競って電文を手にとって確かめようとし  
た。ここの工員に召集がきたのは四人目で、徳平がはたら  
くようになってからでも三人目であったが、まさか徳平に

は、とみな思っていたのである。

「なにかの間違いやなからうか」と一人がいった。「第二乙の召集なんて、聞いたことないがな」

「間違いやったら、こんな電報よこすはずないやろ」

「そうやな、こんな大事なこと、間違うはずないやろうな」

徳平とハツの耳に、それらの言葉はひどく惨酷にひびいた。まちがいなどであるはずがない冷徹な事実を、わざわざ突きつけられたからである。

「沖繩の人間は、内地よりもようけ召集されよるいう話やな」と別の一人がいった。「徴兵検査かて、沖繩はきびしいからな」

「そんな阿呆なことないやろ」

「いや、おなじ体格やつても、ここでは丙種になるのが、沖繩では第二乙になる、第二乙は第一乙になる、いう話やで」

「みな、そういいよるな」と別の一人がいった。

それは徳平も聞いたことのある噂だった。真偽のほどはもろろんわからなかったが、寄留届をして大阪で検査をうければ、沖繩へ帰ってうけるよりも軽くすむ、といわれていたのである。

召集もきびしいという話は、徳平ははじめて聞くのだったが、あるいはそういうこともあるかもしれぬ、といまは思うのだった。

幸四郎さんはあとからやってきて、電文を手にとって読んでいたが、

「五月××日、鹿児島に入隊やな」と事務的な調子でいった。「××日やったら、まだシマに帰るひまがあるが、お前どないする。やっぱり帰ったほうがいいやろ」

「それや帰らなあ」と何人かがいった。

徳平はそれまでずっと黙って、ただ呆然と立っていたが、

「どないしたらいいか、ようわかりません」といった。「これからゆっくり考えたいと思うので、きょうは休ませて下さい」

「あ、それがいいやろ」と幸四郎さんはいった。「ハツもたいへんやな。こんごのこと、二人でよう考えんとな。この仕事のことは、なんも気にせんといいいからな」

二人はそれからみなに慰められ、はげまされて、よろめくように工場を出た。

家にかえつてくると、和男はまだよく眠っていたので、二人はミネへの挨拶もそこそこに、二階へあがった。二人

きりで向き合ふと、ハツは徳平にしがみついてワツと泣きだした。ミネにもはつきり聞こえるような大声で、彼女は慟哭した。

徳平はこんごの生活のことで頭がいっぱいで、涙なんか乾き切つてしまい、ぼんやりハツの背を抱いていた。

しかし、彼はやがてハツの腕をはずかにほじいた。「もう泣くな。泣いているときやないやないか」

たしかに、これまでの確平とした生活設計が根底からくつがえされ、しかも早急に対策を立てなければならぬのだったから、泣いてはいられなかつたのである。

ハツは、徳平に涙を拭いてもらっているうちに、だんだん氣持が落着いてきた。そして、ようやくしゃんとした頭で、こんごのことが考えられるようになった。

二人にとって、まず早急に決めなければならぬことは、ハツと和男はどうするか、ということであつた。

徳平のほうは、ともかく逃げかくれするわけにいかないから、十日後には鹿児島部隊に入隊しなければならぬ。がそのあと、ハツと和男とはいったいどうしたらいいか。このまま大阪にとどまるか、それともシマに引揚げるか。

もし大阪にとどまるとすれば、徳平だけがわざわざ余計

な旅費をつかつてシマにかえる必要はなさそうだった。山入端先生とおなじように、直接鹿児島に行つてもいいのだつた。

しかし、もしハツたちがシマに引揚げるとすれば、それはとうぜん徳平といっしょのほうがよかつたし、そのためにはあすかあさつてにでも、いちばん早い便船に乗らなければならなかつた。

だから、ハツたちの身のふり方は、きょうじゅうにも結論をださなければならなかつたのである。

ハツはしかし、その問題については、ついいまさっきまで何も考えたことがないにもかかわらず、本能的ともいえる機敏な判断で、シマへ帰ることを決意した。徳平はなにも主張はしなかつたが、それを望んでいることが明らかだつたからでもある。

もしハツが大阪にとどまるとすれば、いまのような内戦では生活していけないから、どこかへ勤めなければならなかつた。そして、和男はおぶつてでも働けるようなところでなければならなかつた。

もっとも、和男はもしかしたらミネがあずかつてくれるかもしれないが、それはしかし、そういつまでもというわけにはいかないだろう。そして、そのばあいは相応の

謝礼をしなければならぬはずだが、それはどれくらいかかるものかもはっきりしなかった。

そういう他人の好意に甘える不確かさのほかに、なによりも仕事そのものが、ハツにいったいどんな仕事があるか、どんな仕事ができるかがもつと不確かであった。いまのところ、そんな仕事の心当りはなかったし、もういちど紡績ではたらくのは、もうどうしても気がすすまなかった。

それに反して、シマに帰った場合は、和男は徳平の家族がみんなみてくれるから、ハツはなんの心配もなく働けるはずであった。そして、シマではいまは人手が足りず、田畑を小作に出す農家が多いという。しかもいまは五分五分の作り分けができるということだから、ハツの仕事はいくらでもあるはずだった。

それに、二人の貯金はいま三百七十円ほどになっていた。それだけあれば、一家の帰郷に必要な諸経費をさしひいても、坪一円のわりと良い畑が一反歩は買えるはずだった。背原の瘦地なら、二反歩は買えるだろう。

それだけの畑がもし手に入り（たぶんいまは入手しやすいだろう）、あとは小作で補なっていけば、ナビもまだ人なみに働けるのだから、徳平一家の生活はこれまでの惨め

さから一挙に救われるはずである。徳平がそれを望んでいることは明らかだった。

しかし徳平は、自分の親たちのためにハツに苦勞させることは心苦しいらしく、大阪にのこつても生活していけないことはないだろうと主張した。もしいい仕事が見つれば、貯金をふやしていくこともできるかもしれない、といった。

だが、ハツはそういう希望的な予測に立って、徳平のいなくなつた異郷で、ひとり生きていくことには不安を感じないわけにかなかった。徳平の召集は、これまでの彼女の樂觀的な生活気分をすっかり打ちのめしていた。

もし自分や和男が病氣にでもなり、あるいはもつと別の不幸に見まわれたりしたら、これまでの貯金がどんどん減っていくことも考えられる。

ところが、シマに帰つて一反なり二反なりの土地を手に入れたしまえば、それはもう不動の財産となる。

また、大阪でこれから働くとするれば、ふたたび見習いからはじめなければならず、賃金も安いにちがいない。そしてその仕事は、たぶん紡績の仕事と変らず、きつと辛いことが多いにちがいない。それに反してシマでの農業は、ハツにとって古巣にかえるような安心感があるのだった。

ただ、シマへ帰るばあいの唯一の気おくれは、正吉の一族にたいする負目であった。健一や徳松や、その他さいきんシマからきた人たちの話では、いまはハツのことを悪くいう人はほとんどいないということだが、しかし正吉一族のものは決して釈然とはしていないだろう。とくにツル伯母さんは、まだきつとハツをひどく恨んでいるにちがいない。そういう人に顔を合わせるのが唯一の気がかりだったが、ハツはしかし、それには耐えるほかないと決意した。

シマへ引き揚げることが決まると、いよいよめそめそしているわけにいかなくなった。

徳平はさつそく船の手はずに出かけていき、乗船は明後日の午後四時と決った。

そうなると、荷物の整理や、親戚知人への連絡や、隣組への挨拶や、シマへのみやげものの準備などで、あわたたしく駆けまわらなければならなかった。

シマに引揚げるとなれば、シマの親戚一同に洩れなく相應のみやげものを買って帰らなければならない。ふつうそれは、シマを出たときの餞別へのお返しの意味をもっていったが、そんなものをもらったわけではない徳平にしても、ハツにしても、手ぶらで帰るわけにはいかなかった。彼ら

のばあいはむしろ、相應のみやげものをもっていくことで、人びとに迷惑をかけたことへの償いとしなければならなかったのである。

とくに、彼らは三百円以上の大金をもって、シマに帰ったら畑を買おうとしているのだったから、なんの手みやげもなしにシマの共同生活に復帰することは不可能だった。むしろその手みやげの相應の豊かさで公平さこそが、彼らのシマでの生活のゆるがぬ保証となるのだった。

それだから、彼らはシマを逃げ出してきた前歴のゆえにかえって、みやげものの選定には慎重を期さなければならなかった。

ハツは、徳平の強い要請で、自分の母とツル伯母さんには、それぞれ銘仙の反物を一反ずつ買った。そして徳平の母と父には、スフ混用の木綿の反物とシャツとを買った。ハツがこれからシマで生活していくためには、ハツの母とツル伯母さんの機嫌をとっておくことが何より大事だと、徳平は頑固に主張してゆずらなかつたからである。

ニガミ屋の蒲助とマカトには、開襟シャツと半襟とを買った。

こうして、それぞれの親戚や世話になった人たちに、その重要度に応じて、下着類や風呂敷やタオルや石鹸など

を、いくらか余分に用意した。つい忘れていて、欠礼する人があつてはならなかったからである。

いよいよ出発の前夜には、壮行会が行なわれた。工場の人たちがほとんど仲宗根さんの家に集つた。紡績からも、ハツの知人が何人かきた。

親戚では、利一家（利徳は去年召集されていた）と、ハル姉さん夫婦と、徳松と健一とがきた。

それはちょうど二年まえの結婚式のような賑やかさであつたが、もちろんあのときのような喜びではなく、いまは悲しみの集りだつた。

とはいつても、表面上は、それは徳平の出征を祝う壮行会であつたから、さいしょに挨拶に立つた幸四郎さんは、「このたび、徳平君が名譽の出征をすることになりました、まず私から、お祝の挨拶をさせてもらいます」といったのである。

そして彼は、徳平が国家のため、郷土のために、立派なはたらきをしてくれるようにと激励し、その武運長久を祈つて乾杯しましょう、と挨拶した。

しかしそのような挨拶は、そのうち酒がまわるにつれて、だんだんメッキがはげていった。人びとは、幸四郎さ

んをはじめだれにしる、挨拶と本心とはまったく別だつたからである。

彼らはいよいよは、第二乙種の召集はめずらしいという話から、いったい戦争はまだ永くつづくのだろうか、と話していた。そして、ノモンハン事件では日本はひどく負けたという噂があるし、ヨーロッパではドイツ軍のめざましい進撃がはじまつているから、日本もロシアと戦争をはじめるのではないか、などと話していた。

そうして、一座はいつのまにか出征を祝う会ではなく、戦争がながびくことへの不安と不満を語る会へ、そして徳平の不運に同情し、慰める会へと変質していった。

彼らのなかには、自分にもいつ召集がくるかと、日夜不安におびえているものも少くなかつた。たとえば利一にしても、並里さんにしても、もう三十をとうに越してはいるが、第一乙となれば、召集の可能性は大いにあるのだった。とくに利一のばあいには、「うちちに召集でもあつた日には、もうめちやくちやがな」といつて、しげと三人の子どもをどうしたらいいかわからぬ、と嘆くのだった。

幸四郎さんが、そのうち杯をもってハツの前にやつてきた。

「ハツ、お前しっかりせんとあかんで」と彼はハツに杯を

つきつけないがらいった。

「お前はつらいやろうけどな、そこは歯をくいしばって我慢せんならんで。これはもう、どうんならん運命やさかいな。わしはお前がシマにかえるいうのは、賛成や。ここでは、ひとりでは寂しいやろうからな。徳平のこと思い出して、めそめそするよりは、シマにかえったほうが気がまぎれるやろ。お前は軍国の花嫁やから、軍人節の文句やないが、笑てゝ戻りみせるお願さびら、いうて、徳平を上げましてやらんならんで」

「ハイ」

とハツは涙が出そうになるのをこらえて、しっかりと声でこたえた。

軍人節というのは、さいきんシマから大阪にもつたわつてはやりだしている唄だったが、工員たちが大部分かえつて、内輪の人だけになると、仲宗根さんがよろめきながら立ちあがって、その唄を歌った。

無蔵（お前）と縁結でイ 月よめば（数えれば）わす  
か 別れらねなゆみ（ねばならぬ） 国のためだもの  
思切れよ 思無蔵よ

里（あなた）や軍人の 何んでイ泣きみせが（ますか）  
笑て戻りみせる（ます） お願さびら（しましろう）  
国のため して参れ

涙よりほかに 云言葉や無いさみ

さらば明日の日に 別れとウ思（え）ば  
この二人や 如何がすら（したらいいか）

ハツは、この哀しい調子の唄を聞いているうちに、とうとう嗚咽を押えることができなくなった。

その晩、ハツと徳平とは、前の晩とおなじように、ずつと抱き合つて泣き明かした。そしてハツは、徳平にやるためのお守り（というより形見）を作つてやった。

彼女はきのう、徳平が召集されたことをハル姉さんに知らせにいったとき、それでは急いで千人針をつくらなければ、といわれた。しかし彼女は、それを断つた。そんなことをしている暇がないということもあったが、それよりは、千人針の呪術力になんの信もおいていなかったからである。

シマでは、そういう風習はなかったから、徳平もそんな

ものはいらないといった。

シマでは、男が遠い旅に出るときは、姉妹<sup>せまい</sup>神の頭髮やティサージ（手巾）をもたせてやる慣わしである。姉妹にはシヂ（靈力）があつて、兄弟<sup>あにい</sup>を保護してくれるという信仰からである。

しかし妻には、夫を保護するシヂはない。彼女は夫ではなく、彼女の男の兄弟に対してシヂをもつのである。シヂは血筋を意味する語でもあるから、たぶん母系氏族の血筋という同族意識が、靈力の意味にもなったのであろう。だから妻にはそれがないとされるのである。ハツはそれが不満でならなかった。

彼女も徳平も、もちろんそんなラナイ神の信仰などは、迷信として問題にしていない。徳平がシマに帰れば、たぶんナビは、徳平の妹の安子の髪のお守りとして彼にもたせるにちがいないが、そんなものは、徳平にとっては何の意味もないはずであつた。

それでハツは、自分のお守り、というより徳平が肌身はなさず持つていくくれるような形見をせひやりたいと思つて、いろいろ考へたすえ、頭髮などでなく、徳平にだけしか見せたことのない大事な毛をもたせてあげようと思へたのだつた。

それを徳平に話すと、彼はよろこんで、自分でハツの毛を切ってくれた。ハツはそれを丈夫な紙に包んで、布でお守りをつくり、それをさらしの腹帯に縫いつけた。

翌日、徳平は祝出征のタスキをかけて、工場の庭でふたび壮行会がおこなわれた。ハツはそんなもの見たくも聞きたくもなかったので、うちで荷物の整理をしていたが、その壮行会には町内会の人たちも参加した。そして新聞記事のような型どおりの祝辞がのべられ、万歳が三唱されて、それぞれの人から三十銭ないし一円の餞別が贈られた。

船が那覇の港にちかづく、人びとはさを競ってデッキに上がっていった。

「まだ時間がありますよ」とボーイがいつていたが、徳平たちも手荷物をまとめて、ハツは和男をおぶって、デッキに出た。二人とも両手に手荷物をもっていた。それが彼らの家財道具いっさいで、あとはフトン袋をチッキにしてあった。

外はすっかり夜が明けて、島の背後から昇ってくる朝日がまぶしかった。島がすぐ目の前に、民家や白い墓がはつきり見える近さにあった。しかしそれは懐しいというより、意外に低くひらべったく、ひそやかに、侘びしげに横たわっていた。

ただ、海をわたってくる柔かい微風が生暖かく、その感触が、たとえばいつかどこかで嗅いだことのある匂いのよ

うに、あ、シマだ、という記憶をよびました。

五月といえ、シマはもう夏である。朝だというのに、和男をおぶっている背が汗ばんでくる暖かさだった。

その暖かさは、皮膚だけでなく心まで解きはぐして、シマに帰ったのだという安らぎをあたえたが、しかし徳平とハツとは、その安らぎに身をまかせていることはできなかった。むしろ逆に、数日後には出征しなければならぬ悲運を、つよく意識させられた。もしこれがふつうの帰郷だったら、と思わないわけにはいかなかったのである。

二人はそんな想いで、だからあまりものも言わず、人びとのうしろに立っていた。

那覇の街は、大都市からやってきたせい、意外と小さく、ひっそりとしていた。高いコンクリートの建物がなく、みな同じ高さの瓦屋根が、ひらたたくひしめいている。しかしあちこちに緑の樹があって、赤白まだらの瓦とその緑の配色が、朝の陽をうけて鮮やかだった。

港も埠頭も、思ったより狭く、貧弱に見えた。かつてこの港を出てきたときは、船の大きさや埠頭の殷賑に目をみはったものだが、それがうそのように思えた。ただここでは、あのときは気がつかなかったが、青空がひどく広大に、高く感じられた。そのために、地上のものがすべて低

く、小さく見えるのかもしれない。

埠頭には、徳平の姉が迎えにきているはずだった。ハナはきつと徳平が召集されたことなど知らないはずだから、那覇に着いてから彼女を訪ねてもいいのだったが、そんな余裕はないかもしれないと思って、電報をうっておいただである。たぶん彼女は、徳平がなぜ急に帰るのかわからず、とまどっていることだろう。

しかし、埠頭はなぜかひどく混んでいて、彼女の姿はなかなか見つからなかった。小学生や中学生らしい制服姿の男女がおおぜい整列して、国防婦人会のタスキをかけた白いエプロンの婦人たちや、その他いろんな団体らしい人びとの列が整然と立っていて、それらのまわりに埠頭いっばい人があふれているのだった。

「きつと、だれか軍の偉い人が降りるんやろ」  
とまわりの人たちが話していた。

しかし、そのうちタラップがかけられて、おおぜいの人びとが見まもる静寂のなかを、まっさきに静かに降りていったのは、白布で包んだ箱を首に吊って抱えた数名の軍人であった。そして、人びとがいつせいに黙禱して、彼らを迎えた。

ハツは、それを見ているうちに、胸が苦しくなってきた。

た。和男をおぶっている細い帯でしめつけられた胸が、ドキドキ音をたてているのがわかった。

彼女はニュース映画では、そういう光景を見たことがあった。また新聞でも、「英霊×柱 無言の凱旋」などという記事をよく見かけた。しかし街で、自分の目でそれを見たことはなかった。

彼女はその衝撃にたえかねて、そばに立っている徳平の腕をつかんでぐっと引っぱった。

徳平は、彼女の顔をのぞいて、その目が訴えているものをすぐ理解した。徳平に電報がきた晩、「死んだら、いや!」と泣きつづけた彼女の声が、まだ耳に生々しかったからである。

徳平はうなずいて、そして笑ってみせた。その笑いに、「おれはぜったいに死なない」と誓った彼のことばを、彼女はよみとってくれたはずだった。

英霊とその出迎えの人びとが帰ったあとで、徳平たちはタラップをおりて、ハナに迎えられた。

ハナは徳平には目をくれず、すぐハツのほうに駆けよってきて、

「イヤー（お前）、カナぐわなあ（かい）」

と親愛の気持を顔じゅうにあらわして、ハツの手をとつ